

「なるほどね～・・・ええ事言うわ坂井先生・・・」とつぶやいてしまいました。「子どもの頭の上に吹き出しを付ける」って面白いですね～☆
これはキチンとSOULが出来て初めて出来る事ですよね。皆さんちゃんとSOUL出来ていますか？？

久田

第35回 『わかるように伝えていきますか』

香川大学 坂井 聰

☆コンピテンスとパフォーマンス

コンピテンスとは、ちょっと聞きなれないことはですが、言語に関する知識や、やりとりに関するルールについての知識のことをさします。人と人がコミュニケーションするときには、身につけておかなくてはならない最低限必要な基礎的知識だということが言えるでしょう。単語の意味や文法などは、言語的コンピテンスというように言われます。また、やりとりをする上でのルール、例えば話しかけ方、立場による話し方の違いに関する知識などは、コミュニケーション・コンピテンスというように言われます。

ところで、人と人がコミュニケーションしようとするとき、基礎的な知識（ここでは、コンピテンス）が備わっていたとしても、それだけでうまくコミュニケーションすることができるかというとそのようなことはありません。これらの知識を実際にコミュニケーションの場で応用し、活用するためのスキルが身についていなければならぬのです。つまり、基礎的知識であるコンピテンスを活用するスキルが伴ってこそ、有効なコミュニケーションができることになるのです。

コミュニケーションを実行するレベルはパフォーマンスと呼ばれます。つまり、どのくらいコミュニケーションにエネルギーを割き、何に力を入れて伝えるのかといったことです。パフォーマンスはコミュニケーションの意欲にも左右されます。

当然、コミュニケーションしたいという意欲が高くなれば、パフォーマンスも高くなるということです。コミュニケーション・パフォーマンスには、コミュニケーション・コンピテンスが必要条件となります。なぜならば、いうらコミュニケーション意欲が高くて伝えたいと思っていたとしても、コミュニケーションに関するルールや知識がないと、コミュニケーションは成立しないからです。同様に重要な役割を果たすものとして、コミュニケーション・スキルもあげることができます。

また、その他にパフォーマンスに影響をおよぼすものとしては、その人の性格や疲労といったものも考えられます。

1) 発達障がいがある子どもの場合は

発達障がいのある子どもの場合を考えてみると、単語の意味などの理解が不十分であることがあります。その単語の中に含まれる様々な意味を取り出すことができず、ひとつの意味でしか使うことができないことが多いなどがあるということです。

また、発達障がいのある子どものなかには、普段、会話ではあまり使われることのない難しい言葉を使って話す子どもがいます。難しい言葉を使っているので、その言葉の意味を知っていると思われるがちなのですが、それらの言葉を会話のなかで使っていても、それらの意味を十分に理解しないまま使っていることが多いようです。話しているほどは理解できていないということです。しかし、話していることばが原因で誤解を生むこともあります。周囲の人は理解していると考えるので、実際の能力よりも高く評価してしまうことがあるということです。その結果、子どもの実際の能力と離れた、不適切な指導になる場合もあると考えられるのです。分かっているはずなのにできないのはふざけているからだとか、わざと人を傷つけるような言動をする等と言われてしまうのです。しかし、本人には悪気はないのです。それゆえ、もたらされた結果に至った理由がわからず悩む人もいます。

また、エコラリアの多い子どもの場合には、文法等についても理解せずにコミュニケーションしていることがあります。

自分と相手の人称を間違えたりするようなこともあります。言語的コンピテンスに課題があるということです。また、立場を変えて話すことができないために、言葉遣い等が不適切になり、相手を不愉快にしてしまうこともあります。このようにコミュニケーション・コンピテンスにも課題を抱えている子どもも少なくありません。

2) どのように対応したらよいのか

子どもたちは、わざと人を苛立てようとしてそのようにしているのではありません。一生懸命伝えようとしているのですがうまく伝えられないためにそのようになっていると考えなくてはならないのです。そのように考えた上で、その子どものコミュニケーション能力を適切に評価する必要があるのです。

話していることの何がわかっていて、何がわかっていないのか。コミュニケーション・スキルとしてどのようなことができていて、どのようなスキルが身についていないのかといったことを、冷静に考えて評価することが大切です。そして、子どもの頭の上に吹き出しをつけてみるということが必要になるでしょう。その子が言いたかったことを私たちが冷静になって考え噴出しつけるようにするのです。そして、「それが伝えたいのなら、このように言ってみたらどうかしら」と提案し、練習するようにするのです。吹き出しが見えるようになったら、きっと楽しくコミュニケーションの練習ができるようになると思います。

坂井聰先生の紹介

(プロフィール)

香川大学教育学部卒業 金沢大学大学院教育学研究科修了、香川大学教育学部附属養護学校など養護学校教諭を経て、現在香川大学教育学部障害児教育コース准教授 1997年 自閉症のコミュニケーション指導で辻村奨励賞受賞

(著書)

暮らしの中のコミュニケーション（やまびこの里）クラスルームコミュニケーション（こころリース出版会）自閉症や知的障害をもつ人とのコミュニケーションのための10のアイデア（エンパワメント研究所）など